

# 海外で研究者になる 就活と仕事事情

増田直紀 著, 中央公論新社 発行

(出版年月) 2019年6月, 253 pp. 定価 880円 (本体)

本書は、イギリスの大学にPI (Principal Investigator: 研究主宰者) 就職した著者による、そこでの研究生活、生活スタイル、教育・研究体制および就活事情等についての実体験と、各国で活躍する研究者17名へのインタビューにより構成されており、海外での研究生活をリアルに描写した一冊となっている。海外で研究生活をを目指す研究者のみならず、その他の在外勤務を考える日本人にとっても一読に値する内容である。本書は、日本の研究事情や異国での生活事情等の違いを比較しながら読み進めることができるので、日本の良い点、悪い点を再確認できる機会にもなる。章立ては以下のようになっている。

はじめに

- 第1章 海外の大学で働く?
- 第2章 海外PIになるには
- 第3章 17人に聞いた就活事情
- 第4章 海外の大学での仕事
- 第5章 大学教員生活のお国事情
- 終章 それぞれの道

第1章では、日本の大学の今について、世界の大学ランキングなどを引き合いに出しながら、その現状を憂慮している。日本の大学が「平穏」でありながらも少しずつ危機を迎えている一方、世界の大学業界が荒々しく動いている。それを認めたくて日本と海外の大学それぞれの長所や短所の両面に目を向けつつ、海外で研究者になるというのを選択肢の一つとして考えてみるのもどうだろうと提案している。特に、若くして独立して研究室を運営できること、会議が非常に少ないこと、まとまった夏休みが取りやすいことなどの点は、諸外国の多くの大学に共通して当てはまる特徴で、これらを長所と考える研究者は、海外の大学への就職を考えていいかもしれないと述べている。しかし、概して日本の研究者はどのようにして海外の大学への就職活動を行ったらよいかかわからないのである。そこで次章以降では、著者を含め海外で研究生活を送る17名の経験を紹介している。

第2章では、海外就職のための応募書類作成から面接対応、内定後に至るまでを、具体例を交えて丁寧に説明している。応募書類では、研究説明書、教育説明書、推薦書、履歴書、カバーレターについて、サンプルを示しながらそ

れぞれのポイントについて具体的に説明している。また、日本ではなかなか見慣れないマイノリティへの配慮に関する書類の提出を求められることもあるようだ。応募書類の中で自身の研究のアピールともなる研究説明書は、特に重要である。これまでの論文や研究費の獲得実績だけでなく、将来の研究計画について記されていることが求められ、どのような研究費を獲得する計画があるかを含める必要がある。公募の方向性がある程度知るため、採用する側の研究方針や個々のPIについて、ウェブ等で調べることも必要であろう。これらを考慮に入れながら、研究説明書が一つのストーリーとして仕上がっていることが重要であると述べている。推薦書に関しては、日本ではある種形式的なものであるが、海外では非常に重要な要素の一つであり、通常3~4名からの推薦が求められる。推薦者は、海外の大学に属しているPI (特に教授) であることが多く、推薦書も書き慣れているので任せておいても大丈夫のようだ。日本で博士号を取得した研究者であれば、大学院の指導教員に頼むのが普通であるが、できればこれは避けたほうがよさそうである。必ずしも採用側に推薦者の名前が知られていない可能性があるからだ。ただし、もちろん指導教員が海外でも名前が轟いている場合は、例外である。一方、日本のPIにはいい推薦書の書き方に慣れていない人が多いようである。日本で先生方に推薦書をお願いすると下書きを送って下さいと言われることが多い。しかし、外国では推薦書の下書きを候補者に頼むようなことはほとんどなく、推薦者も真剣に対応してくれるようだ。ただ、海外に3名程度の推薦者が思い当たらない場合などは、数年計画で研究者との人脈づくりを、共同研究や国際会議を通しておこなった方がよいと薦めている。これら応募書類を海外ではネット提出で済むので実に効率的であり、この点は郵送が多い日本でも取り入れる大学や研究機関が増えることを望む。応募書類提出を終えれば、次は書類選考である。ロングリストとショートリストという概念があるようで、前者は書類の一次選考に残ることであり、このときビデオ面接を行う大学も多い。後者は前者からさらに絞り込まれて、実際にキャンパスに赴き面接が実施される。この面接というのが日本とはだいぶ違う点が多い。第一に、面接に際し日本では遠方からでも自費で面接に赴くのが通例であるが、海外では旅費が支給される。第二に、日本では候補者同士と顔を合わすことのないように配慮されているが、海外の場合、彼らは面接で会するだけでなく、会食やお茶を共にする。その他、面接は1日から2日程度かけて、複数の面接官が入れ替わり立ち代わり行うものが多いようだ。これは採用側からすると、今後、同僚として長きにわ

たり働くことになる可能性があるのです。一緒に働きやすい人かなどをじっくり見極めようとする意図なのであろう。複数の内定を得た場合、カウンターオファーといい、採用に関して様々な条件を交渉することも可能であるというのは驚きである。

第3章では、海外でPIとして研究に従事する17名にそれぞれの就活事情についてインタビューをしている。「どういう点が不足していたか」、「こういうことを知っていればもっとうまくいったのではないか」など、経験者であるからこそ重みのある話題が大変参考になる。この件に関して、欧米諸国だけでなくアジア圏の大学や研究機関についても書かれている。

第4章では、海外の大学での仕事について、おもに研究、教育、(教育以外の)大学の業務という三つの柱から日本とイギリスの大学を中心に紹介している。各項目の中身、期待されている仕事内容、評価のされ方、時間の使い方などは、日本と海外ではだいぶ異なるようである。例えば、授業負担や授業評価など、日本とは全く違うことが多い。また、特に目を引くのは、海外では日本より圧倒的に会議が少ないらしい。その理由の一つは、学科長のワンマン、あるいはトップの2、3人だけですべてを決めるというトップダウン化があるようだ。日本にありがちな「皆で合意や確認を取りましょう。共有しましょう。」という方法ではないため、意思決定も早い。ただ、そうなるとトップが誤った方向に暴走しても止めにくいのでは、と心配になるが、それより会議が少ないという長所が、その短所を上回っているようだという点が面白い。二点目が、権限委譲である。部下に意思決定権限を委譲してしまうという仕組みである。各担当の裁量に任せてしまい、それを全員に共有する必要もない。もちろん、重要な案件については、学科長の判断や合意が、必要である。また、会議を欠席する理由として、子供の送り迎えが通るのも、欧米諸国では普通とのこと。これらを参考にしながら、日本でも、会議の持ち方そのものを考え直す時期にきているのだろう。大学の職階についてみてみると、それぞれの国で若干異なっているようだ。通常は、欧米諸国ではテニユア・トラック制度で雇われてから、数年の期間を経てテニユア審査を受けることになっている。ただ、テニユア・トラックでもPIなので、大学院生の正式な指導者になることができる。日本では、競争的研究費の獲得が非常に重要であるが、海外でも一部の国を除き、研究費獲得は必須であり、しかも日本と比べ、だいぶ評価が高くなるようである。例えばテニユア・トラック教員が教授より大きな研究費を取ったとなると、テニユア審査に有利に働くこともあるし、昇進にも大いに影響を及ぼすことになる。

第5章では、第3章で登場した17名に、大学教員生活のお国事情についてインタビューしている。この章を読むと、それぞれの国で教育・研究生活はだいぶ違うことが、断片的にはあるが知ることができた。この章で印象に

残った一文がある。オーストラリアでPIとして研究している方が「(こちらの研究者は)大したことがなくても『俺はすごい』といえるメンタリティを持っている」と述べていた。私もオーストラリアで長期在外研究を実施した経験から、この点について同意できるとともに、やっぱりこのように思っている人が他にもいたかと嬉しくなった。ある意味、このくらいのメンタリティの強さを持ってないと、海外で研究生生活を送るのは難しいのかもしれない。

海外の研究事情等を紹介する記事や本のなかには、その良い側面についてのみに焦点をあてたものが散見される。しかし、本書は海外の大学や研究機関に就職することのメリットだけでなく、デメリットについても述べ、公平な視点で事実を述べ、考察しているところが特徴である。

本学会でも、海外の大学で学位を取得した者やポスドクを経験した者、なかには海外の大学や研究機関で既にPIとして研究活動を行う会員もおり、比較的国際的な活動が盛んな会員が多いと思っている。海外での研究活動という言葉を聞くと国際農業研究協議グループ(CGIAR)の機関の一つである国際トウモロコシ・小麦改良センター(CIMMYT)で、日本人初のCGIAR研究所長を務めた岩永勝国際農林水産業研究センター(JIRCAS)理事長のことが思い出される。氏は長年、国際研究機関で働いてきた中で、国際社会における日本人について次のようなことを述べている。「技術や研究に優れ、世界的に評価を受ける日本人は大勢います。しかし、国際組織のトップとして、指導力を発揮できる日本人がいるかという点、まだ少ない。例えば、野球では選手それぞれに適したポジションと打順があるように、国際社会の中でも日本人に合った役割があると思う。これから先、四番打者を目指すのもいいですが、私としては“監督”をやれるような日本人に出てきてもらいたい。世界各国から人々が集まる組織のリーダーになれる指導力。これが今、日本人にもっとも欠けているものではないでしょうか。」(Agora, 2003年11月号)。英語も流暢に使えない私から見ると、このレベルとなるともう雲の上のこと過ぎてめまいがしてしまいそうである。しかし、このような想いを持った方が、国際的な農業研究に携わる研究機関の日本人リーダーとして、世界の研究者を率いていることを思うと、日本人研究者の一人として大変誇りに思える。

研究に国境はないとよく言われているが、この本を読んで研究者として国籍も国境も関係なく、社会の発展に貢献したいと思った次第である。

なお、著者は終章で、再び公募戦線に参戦したことを述べている。応募した数は88カ所にも上ったようだ。その結果、アメリカのニューヨーク大学バッファロー校に、2019年の夏過ぎには異動している。このタフさには感嘆させられた。

(農研機構 北海道農業研究センター 白井靖浩)